

Ⅳ 復興についての日常時からの取り組み

- ◆先述のⅠ～Ⅲにおいて、震災後の「まち」の復興にあたっての取り組みについて紹介してきましたが、日常時から事前の取り組みとして整理されていると、震災の際にも、復興まちづくりを円滑に進めることが可能と考えられます。また、その意識を活用して建物の耐震補強などの事前対策を促すと、震災による被害を抑止することができます。
- ◆ここでは、本冊子のまとめとして、震災後の復興に対する理解と意識を日常時から育む提案を行っています。

1 復興を視野に入れた総合的な防災活動の実践

(1) 復興をテーマにした防災訓練

- 静岡市では、東海地震が予知された際の行政の対応を検証しその対応を確実なものとするため行われる「総合防災訓練」のほか、各地域では、突発地震に対する地域の防災力を高めるために各自主防災組織が主体となって実施される「地域防災訓練」が行われています。
- 「地域防災訓練」は、情報伝達・避難誘導・初期消火・応急救護・救出・炊き出しなどの応急対策の体験訓練や、起震車・煙体験などの災害時体験を中心に内容が構成されており、復旧・復興対策も合わせて学び総合的に防災活動を進めていく必要が考えられます。例えば、こうした既存の訓練と連動する形で、各地区で被災後、復興の段階に達したというシナリオのもと、個人や地区の役割を学ぶワークショップなどを設けることが想定されます。

現在の防災訓練の概要

総合防災訓練

東海地震が予知された際の行政の対応を検証し、対応を確実なものとする訓練

地域防災訓練

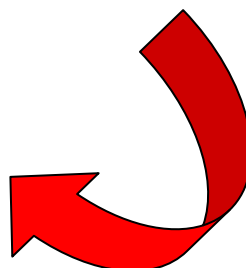
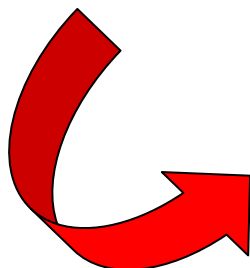
各地域での防災力を高めるために自主防災組織が主体となって実施される訓練

応急対策や災害時体験だけでなく、復興期における住民や地域の役割を学ぶ場を追加することが考えられます。



(2) 復興から日常時のまちを逆検証する取り組み

- 各地区での日常的な防災活動の実践にあたっては、先述のような防災訓練の他にも、災害時に被害が発生しそうな場所を確認する「タウンウォッチング」や、「防災マップ」により地域住民に知らせる取り組みなどが行われています。これと連動する形で、もし被害が発生した際に再建が困難になると想定される区域なども合わせて確認することにより、復興について理解を深めることが考えられます。



(取り組み例の紹介) 復興まちづくりを考えるイメージトレーニング

- 震災による被害の深刻さと復興まちづくりの意識の重要性を理解するための取り組みの初歩として、以下に示す簡単なイメージトレーニングを紹介します。

①大規模地震で私のまちはどうなるの？

- まず、東海地震が発生した場合、皆さんの地域では、どのような被害が発生するかを調べてみましょう。
- インターネットによる「静岡県第三次地震被害想定結果 (GISシステム)」
<http://bousai-shizuoka.jp/higai.htm>
 を用いて、「東海地震による地震動や液状化による建物被害率」を確認します。例えば、皆さんの地域が橙色であれば、地域内の建物のうち 20%~25%*に被害が発生することを示します。

The screenshot shows a web-based GIS application for simulating earthquake damage. It features a map of Shizuoka Prefecture with color-coded areas representing different levels of damage. A legend on the right side of the page provides a key for these colors: blue for 5% damage, yellow for 5% to 10%, orange for 10% to 20%, red for 20% to 25%, and dark red for 25% or more. The interface includes various controls for zooming, map information, and simulation parameters. Numbered callouts (1-6) highlight specific features: 1. A checkbox for 'Major damage' (大規模被害) is checked. 2. A dropdown menu for 'Area' (地域) is set to 'Shizuoka City Water District' (静岡市清水区). 3. The zoom level is set to 1/26000. 4. The map shows buildings colored in orange, indicating a 20-25% damage rate. 5. A separate window shows the legend for 'Damage Rate' (被害率). 6. A checkbox for 'Damage Rate' (被害率) is checked.

* (大破の建物棟数 + 中破の建物棟数 ÷ 2) / 地域内の全建物棟数として算出しています。

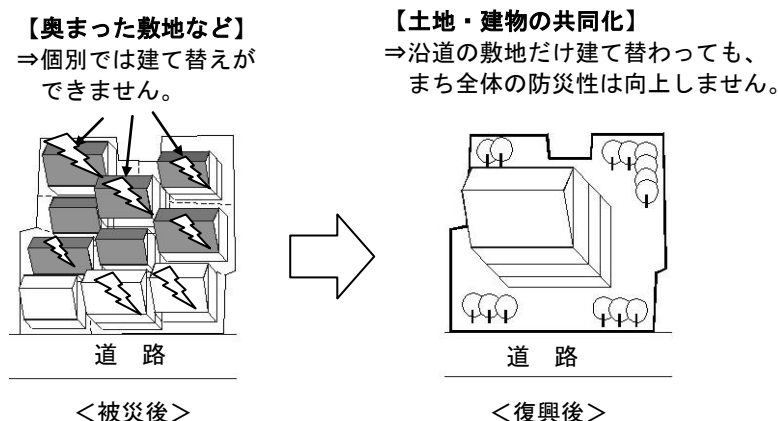


②わたしの自宅が全壊したら再建できるのか？

- 仮に建物が全壊し、被災者自身による個々の再建（建て替え等）を行おうとするとき、被災前の市街地の状況によっては、災害に弱い「まち」を再びつくりたくないために、地域全体の視点から復興まちづくりを検討していかなければならない場合もあります。

<地域全体の視点から復興まちづくりを検討すべき場合の例>

- ◎静岡市では、地区内の大半の建物が被害が発生している場合、建築基準法により、復興まちづくりの検討段階を設けるために必要に応じて建築制限を行います。この場合、震災から1ヶ月～2ヶ月の間は原則として建物が再建できなくなります。
- ◎また、建物を建て替える際には、接道条件（幅員4m以上の道路に面していること）により、細い路地や奥まった敷地などでは、元の形態で再建できない場合があります。この場合、隣近所の建物と敷地を共有し合う「共同建て替え」や、道路や敷地の配置を大きく見直して地域全体として住みよい環境とする「区画整理」など、まちの住民が協力した取り組みが必要です。



《①～②を通じて検討していただきたいこと》

- 以下の点について、各自で、あるいは地区の皆さんと話し合ってみましょう。

- ア) 地震による自宅の被害は、深刻な状況になると思いますか？（まず、自宅の耐震強度を確認し、必要に応じ耐震補強など事前対策が必要です。）
- イ) 仮にあなたの建物が全壊して新たに建て替えるという場合、個別に建替えられる状況にありますか？（道路幅員や敷地形状などを確認しておきましょう。）
- ウ) まち全体をみた場合、個別に建替えられないような建物や敷地はどれくらいあるでしょうか？（建替えられない敷地が取り残されないか考えてみましょう。）
- エ) 多くの建物が被害が生じ、個々に再建できる敷地とそうでない敷地が入り組んでいる場合、みんなが再建できて安全・安心な「まち」にするには、どうすればいいでしょうか？（⇒地域住民が復興に対する意識を共有し、みんなで協力して取り組む必要があります。）

③わたしのまちをタウンウォッチングで確認しよう！

- 皆さんのまちの地図を片手に、防災の視点からまちを確認してみましょう。高いブロック塀や古い木造の建物など、大規模地震の際に被害が発生しそうなところをチェックしてください。また、狭い路地にのみ面した敷地が連担し、安全性に問題があると思われる建物がどれくらいあるのかチェックしてください。



《③を通じて検討していただきたいこと》

- 以下の点について、各自で、あるいは地区の皆さんと話し合ってみましょう。

- ア) 皆さんのまちでは、仮に大規模地震により被害が広範にわたった場合、復興まちづくりを検討する必要があると思いますか？
- イ) 建物の建て替えの問題の他にも、まちの問題点がありますか？
例えば、公園が少ない、建物が建て込んでいる、緑が少ない、など）復興まちづくりを検討する際に、「まちのルール」（地区計画、建築協定など）を定めることにより、これまでのまちの課題を克服した住みよいまちづくりを行うことができます。
- ウ) 大規模地震発生後の住民の安否確認や避難生活についてはどのような課題があるのでしょうか？
応急対策と復興まちづくりを合わせてとらえることにより、総合的な防災の取り組みを検討することができます。

※①～③の手順は、自らの生活環境の理解を重視して皆さんが暮らすまちを対象に行う方法のほか、復興まちづくりの必要性や取り組みのあり方の理解を重視して仮想の地区を対象に行う方法もあります。

《この取り組みの意識啓発効果》

- 日常時の「まちの確認」による「関心」が復興まちづくりの原点です。この取り組みを通じて、まず、隣近所や町内会・自治会で、震災後のまちの復興について考える気運を高めましょう。

- この他にも震災について考え、事前・事後の取り組み（復興やまちづくり、それらについての日常時からの取り組み）をふりかえることができる素材があります。

取り組みの素材①：災害図上訓練（DIG）

参考ホームページ：<http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/dig/>（静岡県地震防災センター）



- 「災害図上訓練（DIG）」は、Disaster（災害）、Imagination（想像力）、Game（ゲーム）の頭文字を取って命名された、誰でも行うことができ、誰でも参加できる地図上の防災訓練です。
- DIGは「掘る」という意味を持つ英語の動詞でもあり、「探求する」「理解する」という意味も持っています。DIGは、「災害を理解する」「まちを探求する」「防災意識を掘り起こす」という意味が込められた防災力を高めるための方法です。

取り組みの素材②：目黒巻

参考ホームページ：http://risk-mg.iis.u-tokyo.ac.jp/Meguro_maki.html（東京大学生産技術研究所目黒研究室）

| | | | | | | | |
|-----|----|-------------------------|--|-----|-----|-----|------|
| 目黒巻 | | 発生 | | 10秒 | 1分後 | 5分後 | 10分後 |
| 記入日 | | TIME → | | | | | |
| 設定 | | 発生時の状況 「どこで何をしていたか」等 | | | | | |
| 季節 | 天気 | | | | | | |
| 時刻 | : | | | | | | |
| 記入者 | | | | | | | |
| 立場 | | | | | | | |

- 様々な時刻や場所、季節や天候に応じて、発災からの時間経過の中で、自分の周辺で起こる災害状況を具体的にイメージしながら、「目黒巻」（インターネットを通じてダウンロード可）に書き込んで、自分を主人公とした「物語」をつくります。
- 「物語」をハッピーエンドに変えるために必要な防災に関する事前・直後・事後の対策や、それらの効果、優先順位がわかる取り組みです。

取り組みの参考例：震災復興まちづくり模擬訓練

参考ホームページ：<http://www.tokyo-machidukuri.or.jp/>（財団法人東京都防災・建築まちづくりセンター）

- 東京都内では、震災復興のまちづくりについて、専門家の協力のもと、住民・事業所・行政が一体となって実践的訓練が行われています。
- タウンウォッチングの実施や建築模型を用いたワークショップなど、数日間にわたったプログラムにより復興プロセスを模擬体験することで、まちづくりや防災に必要な「地域力」を高め、日常の地域活動に活かしていくことを目的としています。

2 日常時からのまちづくり活動の実践

(1) 自分のまちとまちづくりへの関心を高める取り組み

- 震災後の復興まちづくりにおいては、被災を繰り返さないまちづくりを目指す必要がありますが、合わせて日常時からのまちの課題を解決し、皆が住みよい環境にすることが重要です。
- ここで日常時のまちについて考えると、住宅地の閑静な環境に満足されたり、緑が少なく無秩序な街並みに問題を感じたり、まちの雰囲気や秩序を乱す開発に困られたりした方もいらっしゃると思います。日常時から自分のまちやまちづくりに関心を持つことが必要です。

(2) 地域のつながりを育む取り組み

- 阪神・淡路大震災時に建物に閉じこめられたり、下敷きになったりした人々のうち多くが隣近所の人々により助け出されたと言われています。
- 「まち」は、そこで生活する多様な人々によって成り立っています。災害時要援護者、町内会・自治会、商店会、学校などさまざまな人々のつながりを日常時から育むことで、日常時からのまちやまちづくりへの関心が高まるとともに、災害時においても、応急対策における地域での助け合いや、円滑な復興まちづくりにも寄与すると考えられます。

(取り組み例の紹介) 日常時から地域の活動に参加しませんか？

- 日常時から感じる素朴な疑問が、「まちづくりへの関心」です。また、「まちづくり」は道路や公園、建物といった都市計画の範囲のみならず、地域でのさまざまな活動を通じたコミュニケーションも含めて広くとらえることができます。



- 日常時の地域のつながりである、町内会・自治会をはじめとした地域の組織は、「地域活動の母体」です。皆さんも地域の活動に気軽に参加し、コミュニケーションを図ってみませんか？